

(4) マングローブ域漁場の環境特性

マングローブは熱帯を中心に亜熱帯の汽水性の含塩湿地に分布し、ヒルギ科、クマツヅウ科、マヤブシギ科、シクシン科、ヤシ科、アカネ科、センダン科、ヤブコウジ科、キツネノマゴ科などの植物で構成される特異的な樹林である。八重山群島のマングローブ林においては、メヒルギが少なく、アカバナヒルギ、オオバヒルギが高頻度に出現し、それにヒルギダマシ、ハマザクロヒルギモドキなどが加わって種々の群落を形成する。

なお、熱帯性沿岸域において、サンゴ礁とマングローブ林が生育する水域は、対照的な構成要素となっている。

(地形)：マングローブは波静かな砂泥質海岸の平均潮位線付近から最高高潮線に至る潮干帯上部に生育し、特に内湾の湾奥部の砂浜海岸、砂丘や砂州によって形成される潟湖、海岸、三角州海岸及び河川の河口域など堆積環境にある沿岸域に発達する。

マングローブ域に特徴的な地形として、平均潮位より高位の潮干帯上部に著しく平坦地が発達し、そこにマングローブ林が生育して、マングローブ湿地を形成している。

(水質)：マングローブ域は河口域や、河川流入のある海岸の潮間帯に成立するものであるからその水質は、河川の流況や潮汐に伴う海水の流動と、それらの混合のしかたによって変動するこのような汽水性の塩水環境にあるのがマングローブ域である。特にマングローブ域の外側干潟域は潮時により干出と冠水をくりかえす。あげ潮時、満潮時の塩分量は外海水のレベルに近く、逆に引き潮、干潮時は河川水により低塩化する。

(底生動物・海草)：マングローブ域の底生動物の調査によると、マングローブ湿地や外側の干潟、河道や水路などの地域区分によって種類数、個体数、現存量に相違がある。外側干潟には二枚貝類が多く、マングローブ湿地にはカニ類、巻貝類が多くみられている。海産植物についてはマングローブ林内は貧植物性であり、付着藻類のコケモドキの一種とアヤギヌの一種がみられる。外側干潟では海藻の成育はみられず、コアモモ、マツバウミジグサなどの広塩性の海草が成育する。

八重山群島において、マングローブ群落が大規模にみられるのは河川流量、流域面積の大きい河川域である。石垣島では、名蔵川、宮良川、吹通川の各々の河口である。西表島では、仲間川、浦内川、クイラ川、船浦の河口域及び河川上流域までマングローブ群落が発達する。なお、後良川、前良川、その他の小河川の河口域でも小規模な群落がみられる。〈図-1〉



